４．対象地域における施設等の整備状況

（１）施設整備の概要

① 主な交通網・登山ルート

対象地域における主な交通網としては、地域を南北に走る国道 169 号、大台ヶ原山上にいたる大台ヶ原公園川上線（大台ヶ原ドライブウェイ）等が挙げられる。なお冬期には積雪及び凍結のため、大台ヶ原公園川上線（川上村伯母谷地内：国道 169 号分岐～上北山村小橡地内）、国道 309 号（天川村北角地内～上北山村西原地内）[1]及び林道辻堂山線[2]は閉鎖される。

主な登山ルートとしては、公園計画に基づき、大台ヶ原周回線歩道、大杉谷線歩道、筏場大台ヶ原線歩道等が整備されている。

[1] 奈良県土木部道路管理課報道資料「冬期通行止めの実施について」（平成 25 年 11 月 22 日発表）
[2] 上北山村資料「冬期通行止のお知らせ」（平成 25 年 11 月 20 日発表）

表 2-46：車道・歩道に係る事業執行状況一覧

施設計画	名称	区間	地種区分	計画決定	計画目標または整備方針	事業決定	事業執行・事業執行者
車道	伯母峰大台ヶ原線	（起点）川上村：山葵谷～（終点）上北山村：大台ヶ原集団施設地区	特保 １特 ３特	S15.1.11	（整備方針）山葵谷より大台ヶ原に至る車道として整備する	S33.12.16	○・奈良県
歩道	大杉谷線	（起点）大台町：日出ヶ岳歩道分岐点～（終点）大台町：宮川第３発電所	特保 １特 ２特 ３特	S38.3.9	（整備方針）大杉谷峡谷添いに大台ヶ原に至る登山道として整備する	S38.3.9	○・三重県
歩道	大台ヶ原周回線	（起点）上北山村：大台ヶ原集団施設地区～（終点）集団施設地区、逆峠・歩道合流点（起点）集団施設地区～（終点）大蛇嵓、大台ヶ原歩道合流点、日出ヶ岳合流点、集団施設地区	特保 ２特	S38.7.5	（整備方針）大台ヶ原の自然探勝のための歩道として整備する	S38.7.5	○・奈良県／環境省
歩道	木和田大台ヶ原線	（起点）川上村：山葵谷～（終点）上北山村：大台ヶ原集団施設地区	S42.12.5	普通	（整備方針）木和田・小処より西大台を経て大台ヶ原に至る登山道として整備する	S42.12.5	○・奈良県
歩道	雷峠大台ヶ原線	（起点）川上村：山葵谷～（終点）上北山村：大台ヶ原集団施設地区	S38.3.9	特保 普通	（整備方針）尾鷲方面より雷峠を経て大台ヶ原に至る登山道として整備する	－	－
歩道	筏場大台ヶ原線	（起点）川上村：山葵谷～（終点）上北山村：大台ヶ原集団施設地区	S29.10.1	特保 １特 ３特	（整備方針）筏場より大台ヶ原に至る登山道として整備する	S29.10.1	○・奈良県
歩道	和佐又大普賢岳線	（起点）上北山村：和佐又園地・和佐又野営場～（終点）上北山村：大普賢岳	H18.1.9	特保 １特 普通	大普賢岳の一般的な登山道として、和佐又園地、和佐又野営場を起点として整備を行う	H元.6.27	○・奈良県

出典：環境省近畿地方環境事務所「吉野熊野国立公園大台ヶ原・大杉谷地域整備基本計画」、平成 19 年 9 月、16-17 頁
出典：環境省近畿地方環境事務所「吉野熊野国立公園大峯山系地域整備基本計画」、平成 18 年 9 月、20 頁

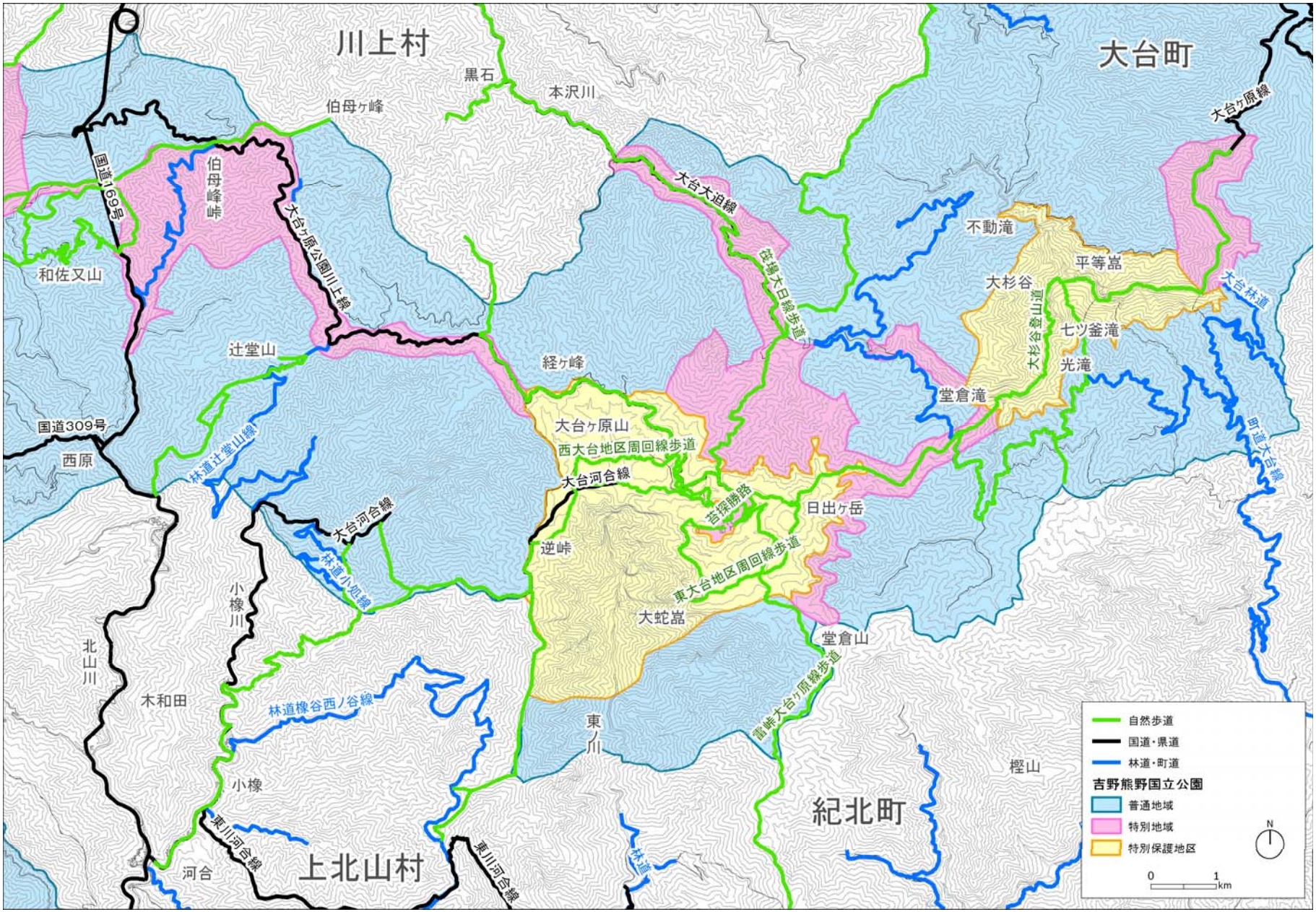


図 2-35：交通網・登山ルートの分布状況

② 拠点施設の分布状況

大台ヶ原の自然や文化及び利用方法などについて情報提供を行うとともに、自然観察会などの自然教育活動を行う拠点施設として「大台ヶ原ビジターセンター」が整備されている。同ビジターセンターは、ドライブウェイの終点、特別保護地区に囲まれた集団施設地区内の駐車場横に立地しており、多くの利用者が入山前に立ち寄ることができる位置にある。旧ビジターセンターは、現ビジターセンターの隣接地に昭和 41（1966）年に開館したが、現在のビジターセンターは、平成 13（2001）年にリニューアルされたものである。

表 2-47：施設に係る事業執行状況一覧

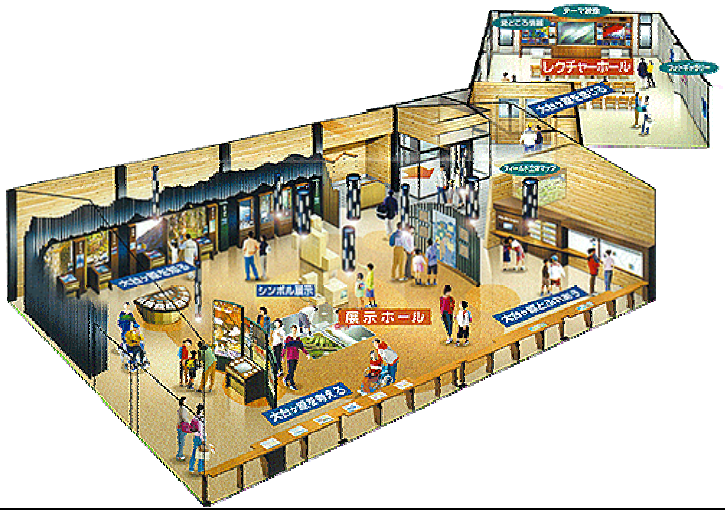
施設計画	名称	区域又は位置	地種区分	計画決定	計画目標または整備方針	事業決定	事業執行・事業執行者
保護施設計画	自然再生施設	上北山村、川上村	特保	H17.7.12	（整備方針）大台ヶ原の森林生態系の衰退を防止しその復元を図るため、食害防止や森林再生等の対策のための施設を整備する	H17.7.12	○・環境省
大台ヶ原集団施設地区	大台ヶ原駐車場	上北山村	２特	S39.12.17	（整備方針）すぐれた自然環境を有する地域の中心部に位置することから、施設の整備は最小限にとどめることを前提に、既存の宿舎、休憩所、駐車場、公衆便所、ビジターセンター、自然探勝歩道等を充実させる。整備に当たっては、景観の保全や排水処理に留意することとする。	S57.7.24	○・奈良県
	大台ヶ原博物展示施設	上北山村	２特	S39.12.17		S41.3.18	○・奈良県（環境省）
	大台ヶ原園地	上北山村	２特	S39.12.17		S49.1.21	○・奈良県
	大台ヶ原休憩所	上北山村	２特	S38.7.5		S38.7.5	○・奈良県
		上北山村	２特	S38.7.5		S38.7.5	○・上北山村
		上北山村	２特	S38.7.5		S38.7.5	○・民間
	大台ヶ原宿舎	上北山村	２特	S37.12.7		S37.12.7	○・民間
単独施設	宮川第３発電所園地	大台町	２特	S63.11.7	（整備方針）大杉谷渓谷探勝利用者のための休憩地として整備する。	—	—
	桃ノ木小屋宿舎	大台町	特保	S63.11.7	（整備方針）大杉谷渓谷探勝利用者のための宿舎として整備する。	S36.9.11	○・民間
	大台辻避難小屋	川上村	１特	S63.11.7	（整備方針）大台ヶ原登山利用者の安全を図るための避難小屋として整備する。	—	—
	堂倉避難小屋	大台町	３特	S63.11.7	（整備方針）大杉谷登山利用者の安全を図るための避難小屋として整備する。	—	—
	伯母峰峠園地	上北山村	２特	S63.11.7	（整備方針）大台ヶ原探勝利用者のための休憩地として整備する。	S63.11.7	

	辻堂山園地	上北山村	３特	S63.11.7	（整備方針）大台ヶ原探勝利用者のための休憩地として整備する。	—	—
	大台ヶ原給水施設	上北山村	特保２特	S36.6.8	（整備方針）大台ヶ原集団施設地区への給水施設として整備する。	S36.6.8	○・奈良県
	粟谷宿舎	大台町	３特	H9.12.16	（整備方針）渓谷と植生の垂直分布が見られる優れた自然環境を活かした大杉谷渓谷探勝利用者のための宿舎として整備する。	H12.2.18	○・民間
	和佐又園地	上北山村	普通	S63.11.7	（整備方針）大峯山及び和佐又周辺探勝利用者のための園地として整備する。	H15.1.29	○・奈良県
	和佐又野営場	上北山村	普通	S63.11.7	（整備方針）大峯山及び和佐又周辺探勝利用者のための野営場として整備する。	—	—

出典：環境省近畿地方環境事務所「吉野熊野国立公園大台ヶ原・大杉谷地域整備基本計画」、平成 19 年 9 月、16-17 頁
出典：環境省近畿地方環境事務所「吉野熊野国立公園大峯山系地域整備基本計画」、平成 18 年 9 月、21 頁

表 2-48：大台ヶ原ビジターセンターの概要

【開館時間】午前９時～午後５時
【冬季閉鎖期間】毎年 11 月下旬～４月下旬
【住所】〒639-3702 奈良県吉野郡上北山村小橡字大台ヶ原山
【連絡先】TEL・FAX　07468-3-0312
【規模、構造等】鉄骨造平屋建一部地下、建築面積 522 ㎡、延床面積 513 ㎡（展示室 160 ㎡、レクチャールーム 81 ㎡）
※展示室を含め建物の大部分を環境省が奈良県に無償使用許可。展示関係は、環境省と奈良県が経費折半し整備。



出典：奈良県資料及び平成 16 年度大台ヶ原自然再生推進計画調査（利用対策）報告書、平成 17 年３月、165 頁より作成

対象地域の宿泊施設としては「心・湯治館大台ヶ原」「桃ノ木小屋」等の 12 施設があり、温泉施設として「道の駅吉野路上北山」が営業している。

またマイカーでの来訪者の公園利用の起点となる駐車場は、次表の６箇所が整備されている。

表 2-49：宿泊施設・温泉施設の概要

名称	所在	備考
和佐又ヒュッテ	奈良県吉野郡上北山村大字西原 1055-1	【宿泊料金】一泊二食付:大人 7,350 円小人 6,825 円 キャンプ利用:入場料大人 630 円、小人 420 円（オートキャンプの場合は別途駐車料 1 台 1050 円)、ロッジ（1 棟）12,600 円～、日帰りキャンプ 1 人 210 円、 【設備】浴場、シャワー、食堂、会議室完備 【宿泊可能人数】500 人 ○夏季キャンプ場（キャンプ広場３ヶ所、貸しテント 100 名分） ○冬季スキー場（コース３本貸スキー200 台可） ※和佐又山は、大峰山系の大普賢岳(1870m)の麓にあり、山頂の展望台からは、大台山系をはじめ、大峰山系の国見岳、山上ヶ岳、行者環岳の山容を望見し、眼下に北山峡を見下す壮大な眺めを誇る。コマドリ、カッコウ、ホトトギス、コジュウカラなど種類では大台ヶ原をしのぐ野鳥がみられ、関西のバードウォッチングのメッカである。
民宿まつもと	奈良県吉野郡上北山村大字西原 1131	【宿泊料金】一泊食事なし:3,500 円（素泊まりのみ）
民宿白滝荘	奈良県吉野郡上北山村大字西原 446	【宿泊料金】一泊:7,350 円
熊野路荘	奈良県吉野郡上北山村大字河合 49	【宿泊料金】一泊:8,925 円
富喜屋	奈良県吉野郡上北山村大字河合 41	【宿泊料金】一泊:7,350 円
民宿タッサン	奈良県吉野郡上北山村大字河合 666-7	【宿泊料金】一泊:6,300 円 【URL】http://www.shokokai.or.jp/29/294511Sq419/
民宿 100 年	奈良県吉野郡上北山村大字小橡 136	【宿泊料金】一泊:7,350 円（素泊まりのみ）
心・湯治館大台ヶ原	奈良県吉野郡上北山村大字小橡大台山	【宿泊料金】一泊:6,720 円より
粟谷宿舎※	三重県多気郡大台町大杉谷	【宿泊料金】一泊:8,500 円（素泊り 6,000 円） 【営業時間】４月下旬～11 月下旬（変動あり）、土日祝日営業（平日、夏休み応相談、完全予約制
桃ノ木小屋※	三重県多気郡大台町大杉谷	【宿泊料金】一泊:8,500 円（素泊り 5,000 円） 【営業時間】 【営業時間】４月～10 月（大杉谷登山道開通期間に同じ）
上北山温泉薬師湯	奈良県吉野郡上北山村大字河合 553-2	【入浴料】大人 500 円、小学生 250 円 【営業時間】 ４月～11 月 平日：午後１時～午後９時まで 土日祝：午前 11 時～午後９時まで 12 月～３月 平日：午後２時～午後９時まで 土日祝：午後１時～午後９時まで ※最終の入館時間は午後８時まで ※冬季営業時間の変更あり（要問い合わせ） 【休業日】第一火曜日、第三火曜日は定休日 ※定休日が祝祭日の場合はその翌日 【泉質】炭酸水素塩泉 【浴用の適応症】神経痛、筋肉痛、関節痛、冷え症

小処温泉	奈良県吉野郡上北山村大字小橡 665	【入浴料】大人 700 円、小学生 350 円、 【営業時間】 平日：午前 11 時～午後６時 土日祝日：午前 11 時～午後７時 【定休日】毎月第２・第４火曜日 ※定休日が祝日と重なる場合はその翌日 ※天候等の都合により臨時休業場合有り。 【営業期間】（冬季休業あり）※要確認 【泉質】硫黄泉（低張性・アルカリ性・低温泉） 【湯温】摂氏 25.6 度（浴用加熱） 【浴用の適応症】神経痛・筋肉痛・五十肩・うちみ・慢性皮膚病・慢性婦人病・糖尿病・疲労回復 ※大台ヶ原の山ふところにある小処温泉は東熊野街道をもう少し下がり、小橡川に沿って枝道を山の中に向う。平成 13（2001）年８月にリニューアルオープン。自然の大小様々な石を使った「岩風呂（渓谷の湯)」槙の香り漂う「木風呂（大樹の湯)」があり、それぞれ渓流に面した露天風呂を設置。

※「表 2-29：施設に係る事業執行状況一覧」に既出

出典：上北山村資料「村内の宿泊施設・温泉施設」及び各施設資料

表 2-50：駐車場一覧

名称	所在	備考
大台ヶ原山上駐車場	奈良県吉野郡上北山村大字小橡 大台山	駐車台数約 200 台
伯母峰峠駐車場	奈良県吉野郡上北山村大字西原	－
駐車場	奈良県吉野郡上北山村大字小橡	右股谷・ｸﾗｶﾞﾘ股谷の交差する場所
駐車場	奈良県吉野郡川上村入之波	大台大迫線、屏風滝近く 有料駐車場
大杉谷峡谷駐車場	三重県多気郡大台町大杉谷	駐車台数５台
駐車場	三重県多気郡大台町大杉谷	駐車台数３台 美濃谷橋横、六十尋滝近く

出典：山と高原地図 51 大台ヶ原高見山・倶留尊山 2013 年版（昭文社）

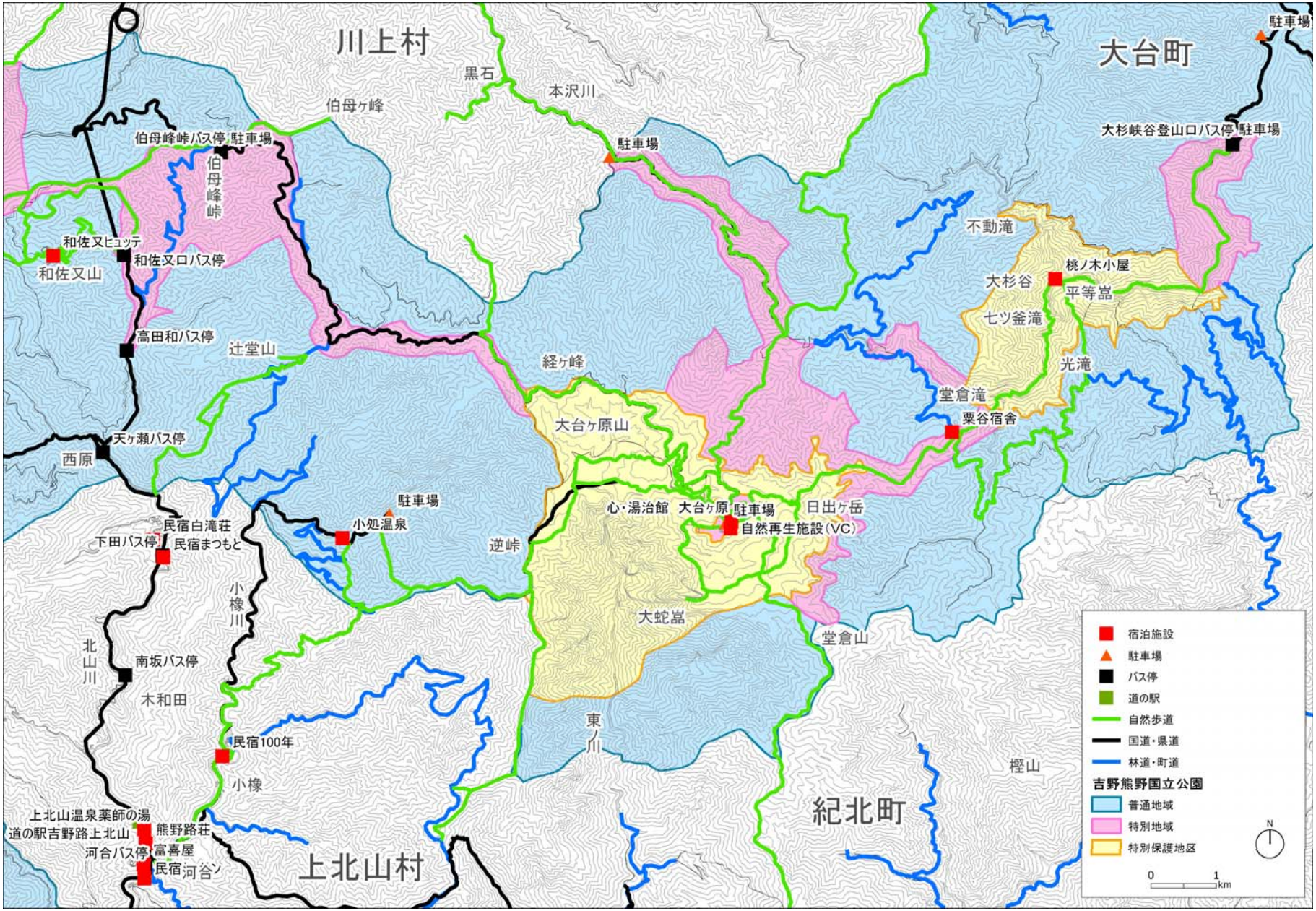


図 2-36：拠点施設の分布状況

（２）大杉谷の歩道の状況に関する現地調査

① 調査の概要

本調査は、大杉谷線歩道の施設整備の現状を把握することを目的として、平成 26 年 11 月 12 日（火）～13 日（水）に一泊二日の行程で現地踏査を実施した。なお１日目の夜に「桃の木山の家」に宿泊して、経営者にヒアリング（詳細は本稿（４） ２）③を参照）を行った。

なお本調査は、大台町が実施する研修ツアーに同行させていただくことで、ルート利用上の注意点等の情報収集を行った。

② 調査結果

■第１日目

（大杉谷登山口～千尋の滝）

・入山口には「中級の登山コース」との案内板があり、始めから急傾斜のクサリ場となっている。

・「増水注意」「落石注意」等の注意標識の他に、利用者に適切な歩き方を伝える看板等が処々に設置されている。

入山口

入山口の案内板

「増水注意」の標識

京良谷の河原

「頭注意」の標識

歩き方のアドバイス

「事故多発地点」の注意標識

「大杉谷森林生態系保護地域」の解説板

「千尋滝」休憩所

「千尋滝」案内板

（千尋滝～桃の木山の家）

・千尋滝からシシ淵にかけては、遭難事故が発生しやすいルートであり、滑りやすい岩場が続く。

・平等嵓吊り橋は、平成 16 年の台風 21 号による大規模崩壊で流失したが、平成 24（2012）年 3 月に新しい橋が再建された。

・不動滝出合を過ぎたところに大台林道への分岐があり、増水時等の緊急時には林道を経由して日出ヶ岳に向かうよう、案内板が設置されている。

滑りやすい岩場を歩く

大岩を横切る

ニコニコ滝近くの避難小屋

国立公園「大杉谷」の看板

再建された平等嵓吊り橋

大台林道コースを示す案内板

■第２日目

（桃の木山の家～大台林道との合流地点）

・七ツ釜滝避難小屋から堂倉滝吊り橋までの区間は、台風 21 号の影響により通行止めであるが、平成 26 年春には全線開通の予定となっている。

・七ツ釜周辺は足元が滑りやすく転落事故が多発するため、注意喚起する看板が設置されている。

・転落事故が多発する区間では、登り・下りの両方に対応できるように手鎖を２段にしたコンクリート階段を設置している。

七ツ釜滝周辺の転落事故を警告

新桃の木吊り橋

「死亡事故多発」の警告

「七ツ釜滝」の展望所

「地形・地質」の解説版（七ツ釜滝）

通行止区間のゲート

転落防止のためコンクリート階段を整備

台風 21 号による斜面崩壊（光滝）

巨岩の下をくぐる

落石防止のネット

急こう配のコンクリート階段

大台林道との合流地点

（大台林道との合流地点～日出ヶ岳）

・ガイドマップ[1]で「スベリ台」と紹介される、滑りやすい急こう配がある。

・尾根を越えたあたりからは平坦な道が続くが、木の根が露出している箇所やぬかるみがあるために足元に注意が必要である。

・日出ヶ岳には、大台ヶ原の利用者が、誤って大杉谷に迷い込まないように、注意標識が設置されている。

粟谷小屋

粟谷避難小屋

利用者への案内版

「スベリ台」と紹介される道

霧が発生しやすい場所

日出ヶ岳へと続く

[1] 大杉渓谷詳細図（桃の木山の家発行、宮川村監修、平成 11（1999）年 6 月 1 日第 6 刷）

日出ヶ岳からの入山者への案内板

大杉谷入山口であることを示す標識

■まとめ

・大杉谷線歩道は、「中級」登山道と紹介されているように、全行程を通してクサリ場やガレ場が多いため、利用者は適切な登山装備と一定レベルの技術が必要である。

・一方で、利用者が安心して登山を楽しめるように、クサリの設置や、岩盤にドリルで傷をつけて滑り止めを作るなど、利用者の安全面に十分に配慮した整備が行われている。

・大杉谷登山センターでは、ボランティアが登山道整備に参加できるイベントを開催している。自らが手を入れることで、登山道に愛着を持ってもらい、リピーターの獲得につなげている。

・利用者に、落石や増水、転落等の注意を喚起する標識が各所に整備されているが、設置後数年を経過し劣化しているものも見られたため、必要に応じて整備が必要である。

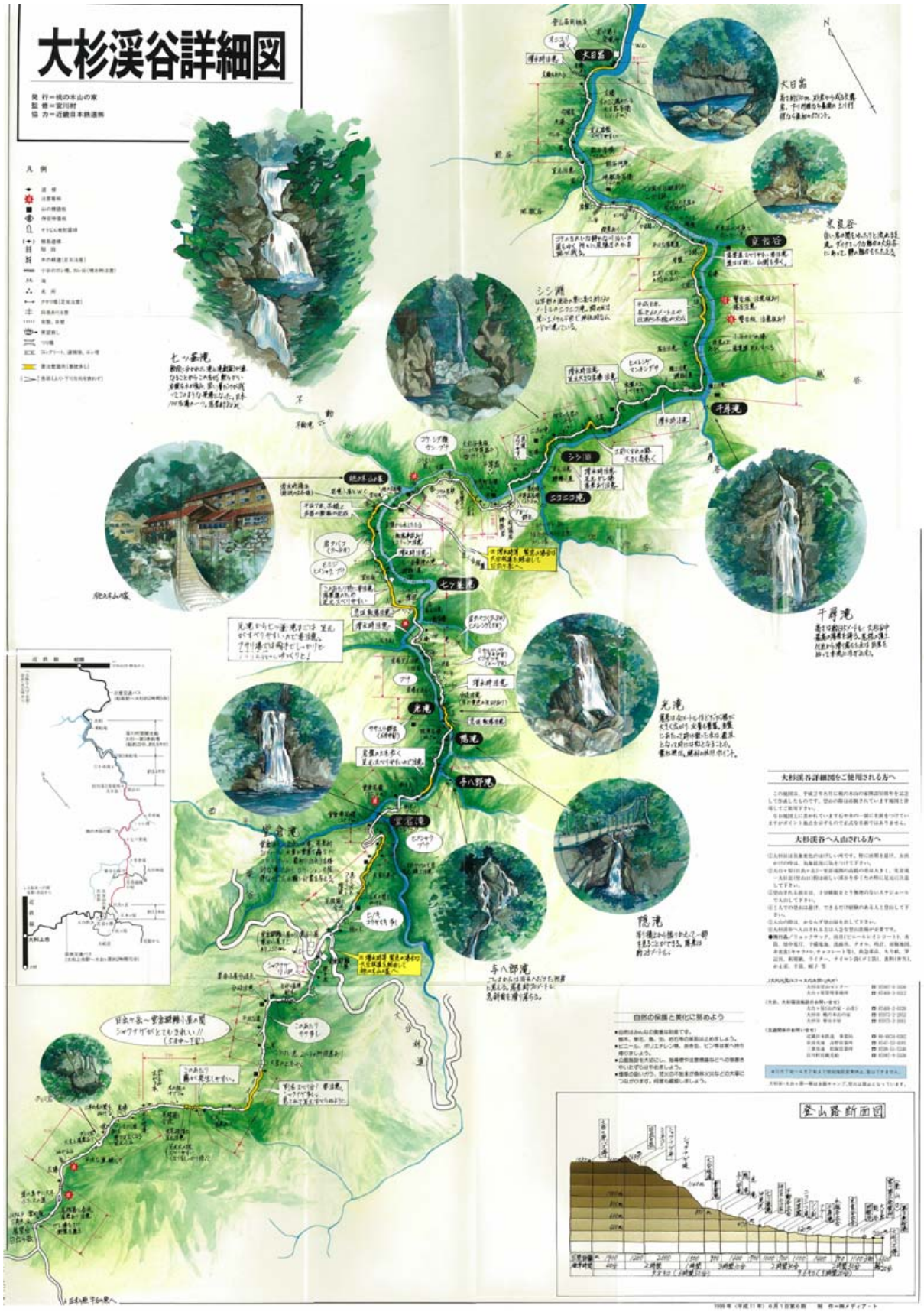


図 2-37：大杉谷渓谷詳細図

※桃の木山の家発行、宮川村監修、平成 11（1999）年 6 月 1 日第 6 刷

（３）施設等の管理者に対する聞き取り調査

１）大台ヶ原の施設等の管理者に対する聞き取り調査

大台ヶ原については、歩道管理者である奈良県自然環境課に対してヒアリングを実施した。主なヒアリング内容は下記の通りである。

① 奈良県自然環境課

ヒアリング対象	奈良県くらし創造部景観・環境局自然環境課自然公園整備係　深見　係長
日時・場所	平成 25 年 11 月５日（火）10：00～ ※電話にてヒアリング

〇自然歩道における復旧工事記録について

・自然歩道における復旧工事については、基本的に環境省が直轄で実施しており、奈良県は資材の購入等をしているだけである。県として、軽微な補修作業は行っているが、特にとりまとめは行っていない。

・山岳遭難事故の発生について、奈良県として記録は作成していない。

・遭難に係る救助活動として、東大台の大蛇嵓周辺で、年に 10 回程度発生している。東大台は軽装備の利用者が多いため、この場所でよく事故が起きているようである。

２）大杉谷登山歩道における施設整備及び利用の実態に関する聞き取り調査

大杉谷登山歩道については、歩道管理者である三重県、大台町、大杉谷登山センター、自然体験プログラム等を提供している特定非営利活動法人大杉谷自然学校、宿泊施設である桃の木山の家の５者に対してヒアリングを実施した。主なヒアリング内容は下記の通りである。

① 三重県農林水産部みどり共生推進課

ヒアリング対象	三重県農林水産部みどり共生推進課自然公園班　渡辺　慎一　主査
日時・場所	平成 25 年 10 月 25 日（金）10：30～11：00 三重県庁農林水産部みどり共生推進課

ア）歩道等の管理状況

〇登山道の復旧について

・大杉谷登山歩道の復旧工事は、平成 23（2011）年度までに、三重県により、第三発電所～七ツ釜滝下避難小屋までの区間が完了し、環境省の直轄事業（三重県への施工委任）により、平等嵜吊橋とその周辺の歩道の工事が完了した。平成 24（2012）年度には、七ツ釜滝下避難小屋～光滝手前崩落地までが完了した。平成 25（2013）年度には、七ツ釜下避難小屋～堂倉滝の整備を実施し、平成 26（2014）年の４月より全線開通する予定。

〇歩道およびその他の施設の維持管理

・登山歩道の維持管理については、公益社団法人大杉谷登山センターが業務として受託し、４月～11 月の間に、歩道の点検を 15 回実施することになっている。歩道や標識等の軽微な修繕は、その際に実施している。

・国の補助が少なくなってきているので、歩道の維持管理の財源には苦労している。

・クサリ場などの維持管理については、点検を行っている登山センターからの要望を聞いて、随時整備しており、安全管理には十分留意している。

イ）その他の施設の管理状況

・登山歩道内の標識の整備状況については、大きな問題はないと考える。大台ヶ原の日出ヶ岳から、間違って大杉谷登山歩道に入る登山者がいるため、注意喚起の標識の充実が必要である。

・登山歩道上には、民間経営の山小屋が２軒あるが、平成 16（2004）年から 22（2010）年までは、歩道の閉鎖に伴い閉鎖されていた。両施設とも、老朽化は進んでいる。

ウ）歩道の利用状況

・大杉谷登山歩道の利用状況としては、平成 16（2004）年度の災害発生による閉鎖以前から利用者は減少傾向にあり、平成８（1996）年の約１万６千人をピークに減少し続けていた。登山道が再開した後も、平成 22（2010）年度 483 人、23（2011）年度 2,405 人、24（2012）年度 2,824 人と低い値に留まっている。

・利用者数を月別にみると、夏前と秋に利用のピークがある。

・来年は、全線開通するため、利用者が急増すると考えられる。昔、来たことがある人が、高齢になって、再度訪れる場合も多くなると考えられるため、安全対策に十分留意する必要がある。

大杉谷登山歩道の入込客数（再掲：図 2-11 に既出）

年度	利用者数	調査方法	年度	利用者数	調査方法
S58	13,000	C	H10	7,247	A
59	12,300	C	11	4,571	A
60	10,100	B	12	3,828	A
61		データなし	13	3,667	A
62	10,330	B	14	4,456	A
63	8,050	B	15	3,131	A
H1	11,700	B	16	2,032	C
2	12,000	B	17	0	
3	12,200	B	18	0	
4	9,230	B	19	0	
5	11,100	A	20	0	
6	14,540	A	21	0	
7	15,037	A	22	483	
8	15,936	A	23	2,405	
9	9,319	A	24	2,824	

※調査方法　A　観光レクリエーション施設の入場券売上枚数等から入込客数を推計したもの。
　　B　観光レクリエーション施設の入場券売上金額等から入込客数を推計したもの。
　　C　観光レクリエーション地周辺の旅館の宿泊客数や売店等の売上金額等から入込客数を推計したもの。

※平成 16 年は、９月の災害以降、登山道閉鎖。平成 22 年は 10～11 月の２ヶ月間のみ。

※平成 22 年の推計は、登山届×1.5
　平成 23、24 年の推計は、登山届×２

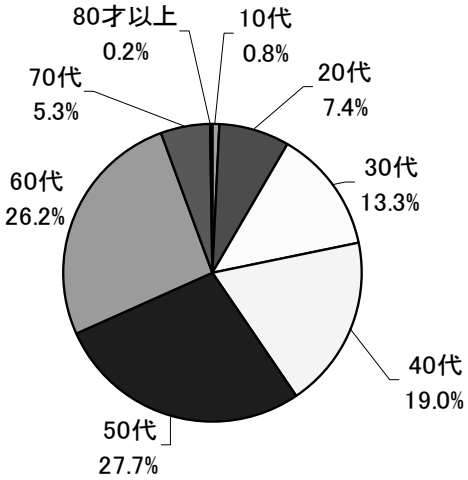


図 2-38：利用者の年齢（平成 24 年度）

※三重県提供資料より作成

エ）安全管理の状況について

・安全対策については、登山届の提出や、大杉谷を歩く際に必要な装備などについて、ホームページを通じて呼びかけを行っている。

オ）自然体験プログラム、イベント等の実施状況について

・大杉谷自然学校が、大杉谷全体で、エコツアーなど様々な取り組みを行っている。また、大杉谷登山センターを中心に、山ガール向けのパンフレットの作成や若者向けのイベントなどに熱心に取り組んでおり、少しずつ若い世代の利用が増加してきている。県としては、これらの取り組みに対して、情報発信などを通じて、支援していきたいと考えている。

カ）協働による歩道管理の実施状況について

・登山センターが、ボランティアの参加による歩道の整備を実施しており、現場で対応可能な歩道の修繕などを行っている。

キ）広報等について

・災害後の6年間、広報等が出来ていなかったが、それ以前の10年間を含めても、広報が不十分であったと感じている。意識調査の結果から、大杉谷に関する20代の認知が低いことや、関西圏と比べて、地元である東海圏での知名度が低いことなどがわかっている。来年度の全線開通に向けて、さらなる広報の充実を図っていく必要がある。

② 大台町・大杉谷登山センター・大杉谷自然学校

ヒアリング対象	大台町役場　大杉谷出張所　野呂　直宏　氏 公益社団法人大杉谷登山センター　曽野　和郎　氏 特定非営利活動法人大杉谷自然学校　森　正裕　氏（大杉谷登山センター、山岳救助隊隊長）
日時・場所	平成 25 年 10 月 25 日（金）15：00～17：00 特定非営利活動法人大杉谷自然学校

ア）歩道等の管理状況

〇歩道およびその他の施設の維持管理

・登山歩道の維持管理については、大杉谷登山センターが、月２回パトロールを行い、その際に、落石、倒木の撤去、東屋の屋根の修繕、石積みの補修などの軽微な補修を実施している。その他に、台風明けやクマが出没した場合などにも、臨時のパトロールを実施している。

・ゴミの収集もその際行っているが、登山者のマナーは良いため、意図的に捨てたゴミはほとんどない。ゴミがあっても、過去の工事業者が捨てたものである場合がほとんどである。

・クサリ場については、過去に事故があった場所や、登山者が立木に捕まる場合が多い箇所などを中心に設置している。安全面からみると、さらに整備したい箇所もあるが、自然環境への影響も考えて、慎重に検討する必要がある。

イ）その他の施設の管理状況

〇標識等

・案内標識の管理も登山センターの仕事である。案内板は、ほぼ等間隔で配置されており、数は十分だと思うが、中には老朽化しているものもある。また、現在、通行止めになっている区間については、維持管理が出来ていないので、修繕する必要がある。

・大台ヶ原の日出ヶ岳から大杉谷登山歩道に入り、シャクナゲ平周辺まで入り込む利用者が多い。そのため、日出ヶ岳の大杉谷の入口に注意標識を設置する必要がある。

・特別保護地区や鳥獣保護区、森林生態系保護地域に関する解説標識がないことも課題である。利用者に、自然生態系のコアゾーンに入っているということを認識してもらう必要がある。解説を読んだ上で、そういう場に入ると、自然に対する感じ方も変わってくるので、そうした解説標識を充実させていく必要がある。

・今回の大崩落は、水害による地形の変化を示すものであり、ロックフィルダムの見本となる学術的にも貴重なものだと思われるので、学術的な解説の標識を設置してはどうか。

〇山小屋

・桃の木山の家、粟谷小屋は、老朽化は進んでいるが、うまく修繕して、快適に利用できるようにしている。山小屋に関しては、一定の登山客がいないと経営が維持できないことが課題である。大杉谷の登山口から大台ヶ原まで歩く場合、必ず一泊する必要があるので、山小屋がなくなると、登山道自体成立しなくなる。桃の木山の家と粟谷小屋は大杉谷にとって絶対に必要な施設である。

〇避難小屋・トイレ

・粟谷から日出ヶ岳までの区間については、雨宿りできるような場所がないので、登山客からも、避難小屋が必要ではないかという指摘を受けることがある。

・トイレについては、整備するべきか、悩ましい部分もある。登山口にはトイレがあり、比較的管理がしやすいが、登山道の中間に設置した場合、管理が難しい。ただ、登山者のモラルに任せるのも限界があるので、バイオトイレに転換していくべきだと考えている。

〇施設整備に関する課題

・施設を整備するときには、環境省の予算で作ることができるが、その後の修繕などの維持管理が、予算の制約があって難しい。施設は、いずれは再整備しなければならないので、更新をうまく進める方策を整える必要がある。

・整備工事を行おうとする場合、環境省、林野庁など各所に許可申請をする必要があり、手続きが煩雑である。環境省が主体となって、手続きを一本化するべきだと思う。自然環境をエリアとして一体的に守っていくためにも、環境省を主体とした体制を整える必要がある。

・日出ヶ岳～堂谷小屋間には、ヒノキの植林地が多いが、放置されて、みすぼらしい状態になっている。環境省と文科省が協力して、自然林に戻す取り組みをしてほしいと思う。現在のヒノキは伐採し、避難小屋等の材料にしてはどうか。

ウ）歩道の利用状況

・災害前にも利用者数は減少傾向にあり、災害の直前には約３千人まで下がっていた。来年度の全線開通後は、年間約８千人を目標にしたいと考えている。再開後、最初の年は、多くの人が訪れると思われ、事故の危険も大きくなるので、対策を考える必要がある。10 年間閉鎖された後なので、昔歩いたことのある高齢者が多く来訪することが予想されるので、特に注意が必要である。

・平成 16（2004）年の災害で大杉谷が閉鎖されたことにより、大台ヶ原の利用者の減少にも大きな影響があったと考えられる。現在も年間 40～50 人が大台ヶ原山上の湯治館に宿泊して、大杉谷を下りてきているので、来年、大杉谷が再開すれば、大台ヶ原の利用者数や利用形態にも大きな影響があると思われる。

・かつては、川上村の柏木が大峰山系の登山の拠点となっていたが、近年は、利用形態が変わり、さびれている。柏木から白髭岳に登り、大杉谷に下りるコースがよく利用されていたが、大杉谷の閉鎖の影響により、利用されなくなった。

・来年度以降は、利用者が増えると思われるが、初年度だけに集中するのではなく、コンスタントに来てもらうことが重要であり、そのための継続的な取り組みを進めていく必要がある。

エ）安全管理の状況について

・事故が発生した際、なかなか迅速な対応ができない場合が多い。朝に事故が発生して、夕方にようやく収容できるといった場合もある。迅速な対応ができるように、情報インフラの整備などの対策が必要である。また、事故等の際のヘリコプターの出動についても、共通ルールを定める必要がある。

・他所と比べて、大杉谷の事故の発生率は高いと思う。以前は、安全対策に関する施設整備が十

分ではなかったが、昭和 54（1979）年の吊橋事故の後は、改良を重ねてきており、整備は充実してきている。

・危険箇所に関しては、落石等の危険がある箇所は、無数にある。また、大杉谷は、滑りやすい箇所が多く、注意が必要。特に、桃の木小屋より下の区間には、水が出ている岩場やコケが多く、滑りやすい所が多い。雨の日には、さらに危険性が高くなる。また、落葉の季節には、濡れた落ち葉も滑りやすいので、注意する必要がある。

・来年度は全線開通するが、光滝周辺は落石の危険があるので、早く通り抜けるように、注意標識を設置する必要がある。また、光滝周辺には、落石等の際の退避場所を設ける必要がある。現在の資材置き場を活用して、退避場所としてはどうか。

・今後、幅広い人に利用してもらう上で、ヤマビルに対する対策も必要と考えている。自然環境に悪影響を与えずに可能な対策を検討していく必要がある。

オ）自然体験プログラム、イベント等の実施状況について

〇大杉谷自然学校

・自然体験プログラムは熊野や台高、南伊勢などで行う場合が多く、大杉谷での実施は、比較的少ない。大杉谷探勝ツアーとして、桃の木小屋より下の区間を歩いて、桃の木小屋に１泊するツアーを、年２回実施している。また、環境省の宇久井ビジターセンターによるツアーとして、登山口から千尋滝まで、定員 12 名のツアーを 11 月 23 日に実施する。

〇大杉谷登山センター

・大杉谷は比較的難易度が高い場所なので、個人の登山者が訪れるきっかけになるようなプログラムとして、年数回、紅葉登山などの登山ツアーを企画しており、本年度で３年目になる。コースは桃の木小屋１泊で往復するコースなど。参加費は、宿泊費、交通費の実費と、環境保全費として１日 1,000 円としている。参加者は夫婦や個人が中心で、年配者から若い人まで幅広い。１回の参加者は４～10 人程度。

・ツアーでは、橋や道などについても説明し、印象に残るツアーになるように工夫している。ツアーの狙いとしては、大杉谷のファン層を増やしたいということがある。また、登山道は利用すればするほど、良くなるので、楽しく利用しながら登山道を保全していくことも目的の一つである。

・登山センターのイベントは、大杉谷登山の入り口と位置づけて、もう一段階上を目指したい人は大杉谷自然学校で、というふうに考えている。

・その他にも、婚活登山などの新しいイベントも実施している。「山トモ登山」として、内容を少し変えて、10 月 26 日に、再度実施する予定。

〇その他

・西大台では、ガイドを利用する人は少ないが、個人で入っても、なかなか自然の奥深い部分は分からないと思う。森の構造や、森が衰退している現状などを、利用者に理解してもらう取組が必要だと思う。

カ）協働による歩道管理の実施状況について

〇歩道のボランティア整備

・ボランティアによる歩道整備を実施しており、６月と７月の年２回、これまでに計６回の整備を実施している。参加者数は各回 30 人程度だが、60 人が参加したこともあった。参加者は 25 人程度がやりやすいと感じている。

・参加者の募集は登山センターのホームページで行っている。また、新聞記事にもなったので、それを見て来る人も多い。三重県、和歌山県や近畿地方の各府県から参加者があり、意識が高い人が多い。リピーターが多く、ボランティア整備で初めて大杉谷に来て、そこから大杉谷自然学校のプログラムにも参加する人も多い。また、ボランティア参加をきっかけに登山を始めた人もいる。

・作業内容としては、石積みの階段の整備など。京都から庭師を招いて、指導を受けながら、頑丈さと景観、水の抜き方なども考慮して石を積み、突き固める作業を実施している。

・ボランティアによる整備に対しては、賛否があると思うが、県の了解を得て、また、林野庁や環境省の理解も得た上で実施している。公共工事で業者が実施する場合、どうしても、コンクリートなどで固めて、水を１ヶ所に集めるような工事になってしまうが、ボランティア整備では、空積みで水を抜くようなきめ細かな作業を実施している。このような空積みによる登山道整備を、もっと広めていきたいと考えている。

・成果として、歩道の状態がよくなってきているのを実感している。来年度開通を目標に、歩道の状態を改善して、事故ゼロを目指したいと考えている。

・参加者が整備に参加することで、歩道に対する愛着を持てるという点も成果だと思う。台風の後などに、自分で整備した箇所が崩れていないかどうか、確認に来る人もいる。

・こうした活動は、メディアに取り上げてもらいやすいという利点があり、大杉谷の PR にもなっている。

・女性の参加者が少ないので、今後は女性の参加を増やしていきたいと考えている。

キ）広報等について

・大杉谷は年配の方を中心に一定の知名度があるが、若い人への知名度はまだまだ低い。いかに登山者の目に留まるような広報をしていくかが課題だが、思ったような広報が出来ていないのが現状である。

・近年では、近鉄各駅に桃の木までの登山道の再開に関するポスターを掲示して、大きな効果があった。また、読売新聞の夕刊に取り上げられたが、やはり新聞記事の効果は大きい。

・来年に向けて、広報費用はあまりかけないで、登山教室を開くなど、これまでとは発想を変えて、メディアに取り上げられるような取組をして、利用者の間口を広げていきたい。桃の木小屋でも、イタリア料理のシェフを招いて、イベントをするなど、新しい企画に取り組んでいる。

・大台町、大台町観光協会、近鉄の協力により、山ガール向けのパンフレット「Ceder」の配布を行っている。若い女性の利用者も若干増えるなど、一定の成果が見られるが、登山者の増加とともに、事故の危険も高まるので、その点は十分注意する必要がある。

・利用者とのコミュニケーションが大切であり、利用者の顔の見える登山道にしていく必要がある。

図 2-39：山ガール向けの広報誌「Ceder」

※大台町・大台町観光協会・近畿日本鉄道観光・レジャー事業部発行（平成 25 年 6 月 10 日発行）

ク）その他

・登山道等の施設整備に関するガイドラインに関する希望としては、登山道の難易度のレベルが客観的に判断できるような基準を設定してほしいと考える。大杉谷の登山道の難易度が、他の登山道と比較して、どの程度であるか分かれば、登山者の安全を確保する上で参考になると思う。

・ただし、大杉谷の登山道の難易度は、判定が難しい。多雨地帯でコケが多いため、雨の場合は、滑りやすくなり、難易度が上昇する。また、上りよりも、下りの方が、危険度が高い。また、季節によっても、難易度が大きく変わる。

・大台ヶ原の利用を活性化させていくためには、筏場道や木和田道、尾鷲道などの歴史ある登山道を復活させることが重要だと思う。

③ 桃の木山の家

ヒアリング対象	桃の木山の家　塩崎　紀史　氏
日時・場所	平成 25 年 11 月 12 日（火）17：00～17：30 桃の木山の家

ア）歩道等の管理状況

・昔は危険な場所も多かったが、近年は、クサリの設置などにより、かなり改善されており、特に桃の木小屋より下の区間が歩きやすくなったと思う。
・道を歩きやすくすれば、登山客も増えるとは思うが、あまり多くの人が来るような場所になっても困ると思う。登山道のアクセス性と、自然保護とのバランスをとることが重要である。

イ）桃の木山の家の利用状況

・桃の木山の家は、平成 16（2004）年９月の災害により閉鎖し、平成 22（2010）年度に再開した。再開後、平成 23（2011）年度の宿泊者は 300～400 人程度、平成 24（2012）年度は 862 人であった。
・平成 25（2013）年度の利用の特徴として、11 月の利用者が多くなっている。
・桃の木小屋の宿泊者は、大台町側の登山口から登ってくる人がほとんどで、上から来る人は少ない。バスで大台ヶ原山頂に行って登山を開始しようとすると、出発が 11 時から 12 時になってしまうため、日没までに桃の木小屋に到達できないためである。
・大台ヶ原側から入って、粟谷小屋に１泊し、大台町側に下りるという利用者もいるが、割合は少なく、全体の１割弱程度。また、桃の木小屋と粟谷小屋の両方に泊まり、２泊して登る利用者も少数ではあるが、みられる。
・桃の木小屋への宿泊者は 50～60 代が多く、近畿圏および名古屋圏の人が中心である。
・１年間の中で、利用者数が多いのは、５月と 10、11 月である。昔は、８月のお盆休みの時期も多かったが、近年は少なくなっている。

ウ）安全管理の状況について

・若い頃に大杉谷に来たことがある人が、高齢となってから再び訪れて、事故に遭うケースがみられる。大台ヶ原から桃の木山の家までの急勾配の「縦道」を下ってくる際に、事故に遭う場合が多いので注意が必要である。特に、七ツ釜滝から桃の木までの間を下る際に事故が多い。
・事故が発生した場合は、まず、桃の木小屋に一報が入り、スタッフが現場に急行し、大台町に状況を報告して、防災ヘリなどの対応を取ることになっている。事故への対策については、大台町や警察、消防等で組織する「山岳遭難対策協議会」で対策を協議している。
・山小屋としても、利用者に無事に帰ってもらうことが最も重要と考えており、事故対策に果たすべき役割は大きいと考えている。

エ）自然体験プログラム、イベント等の実施状況について

・来年度の大杉谷の全線開通に向けて、大台町や近鉄が集まって会議を行っており、来年以降の利用者数の目標を５千人としている。
・桃の木山の家としても、利用の活性化のため、女性スタッフが中心となって、ハロウィンや流

しそうめんのイベントなどを実施している。また、山小屋としても、食事や寝具の充実などを図り、快適に宿泊できるように努力している。

オ）広報等について

・桃の木山の家として、近年では、インターネットのホームページやフェイスブックを活用して、情報発信に力を入れている。

図 2-40：施設案内パンフレット

カ）その他

・大杉谷に来たい人は多いと思うが、大杉谷登山口までの公共交通でのアクセスが難しいことが、大きな課題である。かつては、船でアクセスできたが、現在、定期船はなくなり、予約制のバスを４名以上で予約する必要がある。

・大杉谷の利用を活性化していくためには、交通アクセスに関する情報提供を充実させるとともに、公共交通によるアクセスの改善について検討していく必要がある。

桃の木吊り橋

桃の木山の家

５．歴史文化資源の分布状況

（１）文化財関連

対象地域における文化財一覧を下表に示す。大杉谷が国指定の天然記念物に指定されている他、国や奈良県、三重県の天然記念物に指定されている動植物のうち、対象地域に生息が確認されているものとして、ニホンカモシカ、ヤマネ、オオダイガハラサンショウウオ、カワノリがある。

表 2-51：文化財一覧（大台ヶ原・大杉谷地域整備基本計画区域内）

種類		名称	指定年月日
国指定	特別天然記念物	ニホンカモシカ	昭和 30 年２月１日
	天然記念物	大杉谷	昭和 47 年 12 月 13 日
	天然記念物	ヤマネ	昭和 50 年６月 26 日
奈良県指定	天然記念物	大台ヶ原さんしょう魚（吉野川流域）	昭和 29 年３月２日
	天然記念物	かわのり（吉野川入之波より上流全域）	昭和 29 年３月２日
三重県指定	天然記念物	オオダイガハラサンショウウオ	昭和 33 年 12 月 15 日

出典：近畿地方環境事務所「吉野熊野国立公園大台ケ原・大杉谷地域整備基本計画」平成 19 年９月、24 頁

（２）その他の歴史文化資源

その他の歴史文化資源としては、「古川嵩墓石」「松浦武史郎碑」等が挙げられる。

古川嵩墓石

大台ヶ原開山の祖とされる古川嵩の墓石。古川は、万延元年美濃(現・岐阜県郡上郡美並村)生であり、明治 24（1891）年に初めて大台ヶ原に上がり、修行を開始した。明治 32（1899）年に大台教会を設置し、おおらかな自然賛美の教義のもとにさまざまな階層の人々が集まり、古川行者と呼ばれ親しまれた[12]。

大台教会

正式名称は、「福寿大台教会」といい、神習教の分協会である。開祖は古川嵩氏であり、明治 32（1899）年に、未開の地に約７年かけて完成した[3]。

松浦武史郎碑

松浦武四郎は文政元年現在の三重県松阪市に生まれ、幕末期に蝦夷、樺太、千島の探検を行い、「北海道」の命名者としても知られる。明治維新後には全国各地の探検・開拓を行い、大台ヶ原へは明治 18 年に最初の登山を行ったあと３年にわたり登山した。西大台には本人の遺言に従い、松浦武四郎の分骨碑が建てられた[4]。

---

1 環境省 HP「吉野熊野国立公園大台ヶ原」
2 鈴木林（2001）大台ケ原開山記－古川嵩伝記－
3 近畿地方環境事務所「吉野熊野国立公園大台ケ原・大杉谷地域整備基本計画」平成 19 年９月、６頁
4 環境省 HP「吉野熊野国立公園大台ヶ原」

神武天皇像

昭和３（1928）年、大台ヶ原開山の祖といわれ大台教会を興した古川嵩により建設された[1]。

牛石ヶ原

イトザサの平原に、魔物を封じ込めたとの言い伝えのある牛石がある[2]。

開拓跡地

この一帯では明治時代に何度か開拓がこころみられたが、厳しい自然条件のため頓挫した。約100年の歳月を経て、現在は森林に戻っている[3]。

土倉道

土倉庄三郎により、奈良県川上村から三重県船津に、木材搬出用に開かれた。大台ヶ原への参詣路としても利用され、現在でも当時施工された石積みが残存しており、登山道（筏場大台ヶ原線として利用されている[4]。

河合景徳寺

河合景徳寺の歴史は、630年前（1370年頃）武蔵国より奥吉野に、平朝臣畠山家長が移住して如意輪観音を祀る草堂を開いたことに始まる。後に家長の子孫、畠山義就が草堂を盛んにし、薬師如来を祀る庵を作る。後、義就は京都に帰り、その家臣、大平宗助がこれらの仏像を護り、後日のための弓矢の鍛錬を欠かさなかった。徳川時代に入り、曹洞宗景徳寺となり、薬師堂は景徳寺の一院となる。弓矢の鍛錬は徳川幕府にはばかって薬師の祭日の儀式に名を借りて正月中の最重要行事として今日に至り、「河合弓引き行事」として奈良県無形文化財の指定を受けている[5]。

宝泉寺

上北山村西原に鎮座する社寺であり、鐘撞堂に懸けられていた銅鐘は、奈良県指定文化財に指定され、奈良国立博物館にて保管されている。毎年７月に行われる奈良県無形民俗文化財指定の「虫送り」は、宝泉寺境内での法要が行われる[6]。

水分（みくまり）神社

上北山村小橡に鎮座する神社で、草創は不詳だが、祭神に天之水分神（あめのみくまりのかみ）と、国之水分神（くにのみくまりのかみ）を祀り、1450年代（長禄年間）以前の創設とされている。境内にある老木には、国指定天然記念物のシシンランが着生している[7]。

---

1 環境省HP「吉野熊野国立公園大台ヶ原」
2 近畿地方環境事務所「吉野熊野国立公園大台ケ原・大杉谷地域整備基本計画」平成19年９月、６頁
3 環境省HP「吉野熊野国立公園大台ヶ原」
4 近畿地方環境事務所「吉野熊野国立公園大台ケ原・大杉谷地域整備基本計画」平成19年９月、６頁
5 河合景徳寺資料　http://www.keitokuji.or.jp/
6 上北山村資料
7 同上

北山宮

上北山村小橡字谷に鎮座する。北山宮祭神は後亀山天皇玄孫とされる[1]。

大台教会

松浦武四郎碑

河合の弓引き行事（河合景徳寺）

出典：河合景徳寺資料

水分神社

出典：上北山村ＨＰ

[1] 上北山村資料

６．資源管理への参画状況

（１）パークボランティアによる登山道等の補修活動

パークボランティア制度は、国立公園の保護管理や利用者指導の活動の充実と自然保護の普及啓発の促進を目的として設置された。同制度の発足は昭和 60 年で、環境省の自然保護教育活動推進事業によるパークボランティア養成が４地区で行われたのが始まりである。

吉野熊野国立公園大台ヶ原地区においては、昭和 61 年からパークボランティアの活動が展開されている。パークボランティアの主な活動内容は、①自然解説や利用マナーの啓発、②歩道や看板などの清掃や簡易補修作業、③環境省や奈良県、上北山村のイベントへの協力となっている。

階段の補修

階段の補修

清掃活動

出典：近畿地方環境事務所資料

（２）ボランティアによる登山道等の補修活動

「大杉谷登山歩道整備プロジェクト」は、登山歩道整備ボランティアを公募し、参加者には、現地にて歩道修繕作業を行うことによって、大杉谷登山歩道に対してより深い愛着を感じてもらうとともに、登山者が安全に登山を楽しむことができる歩道環境を整備することを目的とするプロジェクトで、平成 23（2011）年より大杉谷登山センターが主催している。

本プロジェクトは、年に２回開催しており、参加者数は各回 30 人程度となっている。参加者は、三重県、和歌山県や近畿地方の各府県から参加しており、自然環境保全に対する意識が高い人が

多い[1]と報告されている。

ボランティアによる登山道の補修活動

出典：公益社団法人大杉谷登山センター資料

[1] 大台町等へのヒアリング（平成 25 年 10 月 25 日実施、本稿４．（３）に既出）

７．対象地域の現状および課題に関するまとめ

吉野熊野国立公園、大台ヶ原山管理計画区を中心とする本調査の対象地域の現状及び課題は、以下のようにまとめられる。

（１）対象地域の現状

１）自然環境

・大台ヶ原は、台高山系の南端に位置、主要な河川である宮川、熊野川、紀ノ川の水源地であり、傾斜の緩やかな台地状の地形（非火山性隆起準平原）は、日本では希少。
・大杉谷は、宮川の源流に当たり、多くの滝や淵、大岩壁と原生林の織りなす自然の造形は我が国屈指の渓谷美を構成。
・大台ヶ原周辺は、トウヒ群落を含むコケモモートウヒクラス域自然植生、ブナースズタケ群落を含むブナクラス域自然植生自然植生がまとまって分布する貴重な地域。
・大杉谷周辺は、標高の低い方から順に、暖温帯の常緑広葉樹林、千尋滝から粟谷にかけては中間温帯の森林（ツガが優占）、原生林に近いブナ林が広がる。

２）利用状況

・大台ヶ原は、県道大台ヶ原川上線が開通してから登山から観光対象の山へと変貌した。
・山上駐車場があるためにアクセスが良く、軽装備の観光客から本格的な登山者まで幅広い利用者層が来訪する。
・来訪者の居住地をみると、大阪市、奈良市を中心とする近畿地方からの来訪が多い。
・来訪者のグループ構成をみると、２～３人の少人数での利用が中心となっている。
・大台ヶ原の利用者数は、季節により大きな差がみられ、利用が集中するのは、ゴールデンウィークやシャクナゲの開花期の５月、夏休みやお盆の８月、秋の紅葉期の 10 月である。
・大杉谷線は、長距離のために縦走には山中での宿泊を要する。また気象変化の激しい V 字の急峻な渓谷にあって増水や落石などの不確定要素が多く、登山者には相応の体力、装備、一定レベル以上の経験が必要である。
・大杉谷登山歩道は、平成 16（2004）年の閉鎖以前から利用者は減少傾向にあり、登山道が再開後も低迷している。来春には全線が開通するため、利用者が急増すると予想されている。

（２）対象地域の課題

〇自然環境保全上の課題

・大台ヶ原では、昭和 30 年代の伊勢湾台風等による樹木の風倒、ニホンジカの個体数の増加、公園利用者の増加等複合的な要因により、森林生態系の衰退が進行しており、生物多様性の保全の観点から大台ヶ原における自然再生に取り組んでいる。

・西大台地区においても同様の自然環境の劣化が懸念されていたため、良好な自然環境を保持し、より質の高い自然体験の場を提供するため利用調整地区に指定された。現在は、事前に申請をして認定を受けた者のみ西大台への立入りが可能である。

・東大台では紅葉シーズンに利用が集中し、歩道の混雑やドライブウェイの渋滞が生じている。歩道の混雑は歩道外への踏み入れを誘発し、浸食が進むほか、利用者にとっては静かに自然を楽しむ機会が失われる。またドライブウェイの渋滞は路肩駐車の発生を招き、周辺植生への影響や利用者の安全確保の面からも問題となっている。

・利用者のマナーについて、ごみの持ち帰り等は守られているが、一部にペット同伴で散策する利用者が見られ、生態系への影響が懸念される。

〇利用者の安全確保上の課題

・大台ヶ原では、核心地域にまで車道・駐車場が整備されているために、軽装備の観光客から本格的な登山利用者まで幅広い層が来訪している。

・軽装備の利用者が、大蛇嵓周辺の急傾斜で転倒する事故が起きている。

・大杉谷線歩道は、急峻な地形や多雨のため難易度の高いルートとなっているが、来春の全線開通により利用者の急増が見込まれており、安全性の確保が課題となっている。

・案内標識には老朽化しているものもあり、現在通行止めの区間では、維持管理が出来ていないものがある。

・大台ヶ原日出ヶ岳から、大杉谷線歩道に迷い込む利用者が見られる。

〇利用促進上の課題

・筏場道や木和田道、尾鷲道など、大台ヶ原の歴史・文化と関わりの深い登山道があるが、通行止め区間があるなど、現在はあまり利用されていない。

・大杉谷線歩道の登山口に向かう登山バスが、４名以上での予約制運行となっているため、利用しにくいとの意見が見られる。

・アンケート結果からは、大台ヶ原周辺施設のトイレの増設、洋式トイレの導入等、トイレの改善を求める意見や、大台ヶ原ドライブウェイの混雑等に関する意見が見られる。